

# 連載講座

第37回

## 江戸のオランダ学者の努力・前野良沢

作家 童門冬二

### オランダは鎖国の例外国

鎖国後も日本と交易を認められたのが中国とオランダ国だ。しかし日本の医学や医術はほとんどが漢方（中国）一辺倒で、薬も漢方薬といってその方面のものが多かった。が、長崎の一角にオランダ商館を認められたオランダ国には、常に医師がいて、時に商館外に出ては、長崎の日本人の治療介護に当たってくれた。最初オランダ医学が日本に伝えられたのは、このオランダ商館の医者による手術や治療の実際を見ていて、実技の方から日本に伝播したのである。学説を書いた書籍への接触はあまり無かった。しかもその頃の日本人は、オランダの医書などを「蛮書」と呼んでいた。これは中華思想によるものだ。中華思想というのは、「自分の国の文化文明が世界で一番すぐれている」という考えで、周囲の国や民族を方面別に東夷・西戎・北狄・南蛮などと区別していた。区別よりも差別と言っていいかもしい。そのため眼の青い外国人は“南蛮人”と呼ばれていたもので、その蛮をとって書物を“蛮書”と呼んでいたのである。

しかしこの医学・天文学・本草学（植物学）などに関心を持つ学者たちは、オランダの学術書を懸命に勉強し、その正しい訳本を日本に伝えるべく努力していた。前野良沢もその一人だ。前野良沢は、“ターヘル・アナトミア”というオランダ

語による解剖図を持っていた。たまたま、幕府が江戸小塚原の刑場で罪人を処刑し、その解剖を見学してもよいと告げた。良沢は同じ志を持つ杉田玄白と共に、刑場に駆けつけた。そして、ターヘル・アナトミアがいかにか正しい解剖図であるかを、現実に罪人の腑分け（解剖）を見て知った。この見学が動機となって、良沢は玄白と相談し、

「ターヘル・アナトミアを正しく日本語に訳し、日本の医術界の発展を図ろう」と相談した。作業が始まった。しかし、オランダ語の字引も無ければ、参加者のオランダ語知識も薄い。わずかに良沢が、青木昆陽から手ほどきを受けていただけだ。青木昆陽は“いも学者”と知られている。

「災害時の食料を米だけに頼ると不足を来す。代替食の開発が必要だ」といって、魚屋の息子であった昆陽は時の江戸町奉行大岡越前守忠相にこの旨の意見書を出した。大岡は感心し、

「すぐに試作栽培に掛かってもらいたい」と言って、幕府の土地を貸した。昆陽はこの面で成功した。しかしかれは熱心なオランダ学者であつて、昆陽自身も、

「今の“蛮学”と呼ばれるオランダ学を、もっと正しい場に位置付けたい」とかねてから願っていた。昆陽のオランダ語はしかし、長崎で通訳から得たもので、単語の暗記だ。四百語ばかり頭の中に植えていた。良沢はそれを昆陽から伝授されたのである。したがって、文法などの正当な学

び方をしていない。

良沢は、昆陽から単語を得た後に、実際に長崎に行って通訳からもっと深まる学び方をした。

しかし学者たちの学力が、この“ターヘル・アナトミア”の翻訳に、歯が立たなかった。一語を訳すのに七転八倒した。たとえば顔の鼻についても、「顔の中央にあるうず高き丘」などという訳し方をしている。現在なら、笑い話になってしまうだろうが当時の本人たちは真剣だった。こういう和訳に汗の限りを流していたのである。

苦心惨憺の末、安永三（一七七四）年八月に、ターヘル・アナトミアは「解体新書」と名づけられて五巻に亘る本が出版された。しかしこの本は、訳者は杉田玄白であり、協力者として中川淳庵・石川玄常・桂川甫周の三人の名があがっている。前野良沢の名はない。ただ吉雄耕牛という長崎の幕府通詞の書いた序文に「この本は前野良沢・杉田玄白二人の訳による」という趣旨の文がある。また玄白が晩年に書いた「蘭学事始」という回顧録には、前野良沢の翻訳に対する努力ぶりが細かく書かれている。

では、なぜ前野良沢の名が「解体新書」から除かれたのだろうか。これは杉田玄白たちが、翻訳作業の功績を自分たちだけで占め様などというさもししい気持ちから起こった現象ではない。むしろ、良沢自身の辞退によって起こったことだと思う。良沢は、翻訳だけではなく、オランダ学の修め方についても厳しい考えを持っていた。つまりかれは、「翻訳は、あくまでも原本に即して行わなければならない」という筋を通していた。しかしターヘル・アナトミアの翻訳時の良沢のオランダ語に対する力はまだまだであって、本人自身がいつも、「これでいいのかな？」と、自身に疑いを持つような状況だった。鼻を訳すのに、

「顔の中央にあるうず高き丘」などという訳をしていたのではどうにもならない。良沢自身は、おそらくこの作業の過程では自分の学力の不足を嘆き、また同時に恥じていたことだろう。そうな

ると、

「学力不足のままに翻訳した本に、名を連ねることとはできない」

という良心的な反省から、自ら、

「私の名は外してほしい」

と申し出たに違いない。つまり良沢の「学者としての良心」が許さなかったのである。しかし後世、説によっては、

「とにかく出版を急ぐ杉田玄白の拙速主義とは意見が違ったのだろう」という説がある。そうかも知れないが、これはやはり良沢の、

「正確で確実な和訳をすべきだ」という筋からの所業だと思いたい。

これは、青木昆陽も同じだった。昆陽は良沢に四百語の単語を紹介したが、しかしその後良沢たちがターヘル・アナトミアの翻訳に七転八倒して苦しんでいるという噂を聞いた時、昆陽は昆陽なりに反省した。つまり、

「中途半端なオランダ語の教え方をしたことが恥ずかしい」と感じたからだ。昆陽も以来改めてオランダ学の習得に努力した。こういう良沢や昆陽の努力によって、やがて「蛮学」として、一種の蔑称を与えられていたオランダ学も、玄白が書いた「蘭学事始」などの出版も力を添えて、正しく「蘭学」という呼称が定着しはじめた。

こういう様相を見ていると、江戸時代のオランダ学者たちにはいわゆる“パテント”などというセコイ考え方はない。あくまでも、

「世の中の役に立てば、そんなことはどうでもいいのだ。人々の幸福に繋がってくれさえすれば、自分たちのことなどどうでもいい」

という、高いヒューマニズムがあったと思う。これが言ってみれば、江戸のオランダ学者たちのいわば“品位”なのである。公共のためには、私利私欲を全く追求しないという態度だ。特に「解体新書」から最大の翻訳者としての名を削られても、それに甘んじた良沢の品格の高さは今でもわれわれの胸を打つ。